

熟年俳句誌

6 2013年  
月 号

かたね  
ふ



# 黒羽集

(十八)

佐藤喜仙

門前の乙女椿に迎へられ

薄氷を軽々渡る石たたき

うららかや寝ころぶ猫の白き腹

菜の花の影に集まる小鮠かな

小川の空ふさぐばかりに花の雲



春の海さゆらぐ浮子に眼の落つる

窓越しに笑ひの洩るる春灯

器には有田か萩か木の芽和

入学式制服といふ箍にをり

亀に向かひ鳴けと言つたと四月馬鹿

囀の一途の声のかさなれる

平安の牛車の君に春の夢

# かきね集

## 白選句集



## 「高原の春」

松本周二

雪形を朝日に曝す大浅間

馬酔木咲く信濃追分街道筋

涅槃の日暮れて来世を諾へり

天空の塔より花見隅田川

今生の桜浄土をそぞろ行く

鬚剃らせをり蛙の目借時

## 「彼岸寺」

古川千鶴

燭台に蠟涙しづく彼岸寺

雪柳四方へ光をふりこぼす

天へ疾く風船見上げみる親子

水仙や借りし東司の薄明り

差し潮に右往左往の花筏

吊橋に佇む鶯谷渡り

## 「春の海」

川井素山

磯桶の波間にゆれて海女の笛  
春の昼網ぬふ漁夫の猪首かな  
土筆ん坊摘みし堤や渡し舟  
居酒屋や桜話しの残り客  
浜の朝素足で若布拾ふ男  
つづら坂登り現はる春の海

## 「花」

安藤虎酔

咲くを待ち咲けばすぐ散る花惜しむ  
睦まじく新茶に憩ふ老夫婦  
雨あとの色鮮やかに花菖蒲  
彼岸会の僧滑らかに法を説く  
森の木々素肌になりて春を待つ  
はればれと心を癒す若葉風

## 「たんぽぽ」

田島昭久

たんぽぽは庭の片隅道の脇  
竹の秋筍守る網の垣  
梅林を暫し忘れて屋台かな  
春雨に何も聞えず声ださず  
橋くぐる観光船や隅田川  
春半ば園児薄着で声を出し



# 撫子集

## 主宰選



散髪の缺の音や夏近し

一人居に遠き警笛春愁

剪定に落つる小枝やれんが道

囀りや開け放ちたる大広間

履物の乱れしままや花疲れ

米田 文彦

黄蝶飛んでやがて菜花に紛れけり

新装のカフェ賑はへり花の道

早ばやと模擬店たたむ春嵐

品書に露味噌とありガード下

板長のテーブル巡る春ともし

小池清司

むさし野の空押上げて桜満つ

桜ばな散るべく咲いて夜を散る

なはとびの縄草萌えの地を打てり

ビル影をはなれて初蝶影を生む

宅配にドアを開くれば初音して

長久保郁子

一斉に咲きし辛夷の白さかな

春霞頭出したるスカイツリー

緋牡丹の鮮やかに咲き香り立つ

見渡せば百花繚乱風光る

葱坊主残して畑地耕せり

青木英林

雑談をしぼし止めるや桜湯に

岡野安雅

影追ひて犬の散歩や月朧

朧月明石大橋暗く染め

上賀茂の杜ひつそり花菜漬

霾や稜線靄り目を擦る

露のたう耐へし寒さの苦みかな

山本達人

妙高山豊作約す斑雪馬

花散りて猫居眠れる昼下り

啓蟄に老輩ぶらり散歩かな

永き日の一杯の酒桃源郷



# 那須野集

## 主宰選



木洩れ陽に揺らぐ露天湯山霞む

丸山酔宵子

人待てば雨を呼びたる紫木蓮

小柳千美子

板前の枝垂れ桜や寿司つまむ

林道に人の声して郁子の花

提灯の灯りに揺るる花の雨

カクテルのうすももいろに春惜しむ

日暮れ時麓の灯山霞む

静けさに桜蕊降る水辺かな

散る桜緑が映える花提灯

春愁や伝言入れず受話器置く

流水に映りきらめく白木蓮

橋本修平

のんびりと節伸ばしたる土筆かな

池内とほる

永き日や伸びたる足の爪を切る

甘茶汲む幼き僧のぼんのくぼ

永き日の書棚の整理妻の留守

春めくや白装束の宮大工

遅き日の前後に子乗せ母歌ふ

春風に揺るる木洩れ陽若葉色

春眠や子の名を呼びて起こす母

つくばひを覆ひ尽すや花の屑

さらさらと転げ回るや花吹雪

柳田皓一

春日和子等が背比べ芭蕉像

和田勝信

旧友と飲み語らひて葉桜や

黒塀に挟まれし道春の海

散り初むる花の葉色の鈍きかな

近付けば鬼瓦かな花曇

チューリップ八方に広げしぼみけり

神域に春の小川や砂利の音

松蟬の少し遠きに鳴きにけり

糸桜砂利に一筋轍かな

十字架の丘にひと本八重桜

田中清秀

音立てて飛びたつ鴨の春霞

後藤克彦

花盛りベビーカーもまた車座に

さり気なく花菜ひとつを皿にそへ

花の精住みたるごときチューリップ

梅香る風に誘はれ小さな旅

春時雨山路を塞ぐ孔雀羊歯

雪解けの清水を求め山路行く

春の鯉尾ひれで描く墨絵かな

気づかぬまに空き家増えたる路地の春

暮なづむほんのり灯火の花見酒

森岡陽子

白梅の小枝に遊ぶ小鳥かな

吉田博行

駐輪場ミノ倒しの春嵐

久遠寺の大釣鐘や梅香る

手を合す塔婆にまきつく蔦若葉

身延山梅の香りの大伽藍

散策にさへづり近き神の杜

鐘の音や霞にけむる大伽藍

新入生合はぬサイズの袖を折る

花冷えや手を擦りつつバスを待つ

# 撫子集・那須野集鑑賞四月号より

客員 村上克哉

## 撫子集

向き合へばいつものはなし春炬燵

小池清司

春になつてもしまいかねている炬燵、昼間は暖かくても雨の日や、朝晩の寒さがあるときに、少し温まるのに便利で、家族が集まりくつろぐのが炬燵の間である。母や妻の座をはじめ四つの座はそれぞれ決まっているようでその座に主がいて落ち着く。向き合うのは気心の知れたいつもの相手、話題も共通して睦まじい様子が韻律よく詠まれている。

春泥に小さき靴跡ふたつみつ

米田文彦

春雨や雪解けなどによって、道路や公園の人の通り道に生じる春のぬかるみ。舗装道路の増えた都会

では泥んこ道は見られない。自然環境の豊かな公園や土手の道に、春の訪れを待っていた子供が元気良くぬかるみにわざわざ踏み込んで遊んだ小さな靴跡。季節感溢れる光景。二つ三つの靴跡は真新しい長靴にはしゃぐ幼児か、聞き分けのいい児かも知れない。

茹でるはずの花菜コップに咲き初むる

長久保郁子

菜の花は古く中国から渡来し、高く臺を立て黄色の四弁花を傘の形に密集させて咲き、房総方面で多く栽培されている。満開の桜やももの花が咲くころ一面に咲き続けている光景は明るくいかにも春らしい。花菜の蕾を芥子和え、菜の花飯、菜の花汁、付け合わせ等にするつもりで摘んできた。食べるよりも花を愛でる風流に応えるようにコップに差しておいた菜の花が綻びはじめた。省略のきいた気持ちのいい句。

(以下略)

## 伝言板

### 1 第十八回本部句会(原則第二金曜日)

①日時 2013年6月14日(金)

14:00~17:00

②場所 目黒区「下目黒住区センター」

3階会議室

③投句 当季雑詠 5句

④会費 10000円

### 2 第十九回本部句会

①日時 2013年7月12日(金)

14:00~17:00

その他事項は第十八回に同じ

### 3 第十八回吟行(原則第四火曜日)

日時 2013年6月25日(火)

場所 国立自然教育園(港区白金台)

集合 庭園正面入口前 11時30分

「目黒駅」より高輪方面へ

徒歩約10分

都営三田線「白金台駅」よ

り目黒方面へ 徒歩約10分

昼食 各自持参

### 4 第十九回吟行

日時 2013年7月23日(火)

場所 清澄庭園

集合 大江戸線・半蔵門線「清澄

白川」改札出口 15時

句会場 庭園内「涼亭」

夕食 仕出し弁当・飲物を用意

出句数 嘯目2句

費用 交通費・入園料各自負担、

句会場費・飲食代均等割り

その他 句会終了後「納涼会」をお

こないます。

詳細は次号にて

### 5 「かさね」友の会の皆さん

投句をされる時、裏面に「友の会の声」

欄がございますので、句評、近況報告、

ご意見などご自由にお寄せください。

なお友の会の皆さんの特別作品(十句)、随筆、その他論文等をいつでも投稿することができます。お待ちいたしております。

## 会員募集

何時からでも「かさねの友」になれます。

年会費 12000円(前納)

ただし年次途中入会者

は入会申し出の翌月より

12月まで月割りで納付

見本誌 400円(切手可)

見本誌請求先

15210033

東京都目黒区大岡山2-17-15

かさね俳句会 佐藤喜仙

# 「かさね」俳句の基本

## I 前提

- 一、俳句は世界最短の「詩」である。
- 二、有季・定型・文語体を旨とする。

### ① 「詩」とは

水原秋櫻子が俳誌「馬酔木」の昭和六年（一九三一年）十月号に載せた「自然の真と芸術上の真」より抜粋

「ただ自然の真だけを追求したところで詩人たる資格はない。心を養い、主観を通して見たものこそ文芸上の真で、これを尊ぶ人が詩人である」

### ② 有季の原則

#### 原則①

「季語とは累々と先達が磨いてきた季節を表す言語群であり、歳時記により集大成されている」

#### 原則②

「季語が一句の中で使われ、その句の季節を明確に表出する時、その季語を「表季語」と称する」

#### 原則③

「一年を通して存在する現象、あるいは事物が季を定められている語彙の場合、その定められた以外の季節においてはその語彙は季語とは見做さない」

#### 原則④

「季重なりとは同季に属する季語を一句の中で二語以上重ねて使用する場合をいう」

#### 原則⑤

「例えば絵・版画・掛け軸・屏風・襖絵等に描かれた、通常季語と見做される花鳥等は、季感がないので季語とはみなさない。同様比喩に使われている通常は季語である語群もやはり季感が無きがゆえに、季語とはみなさない」

### ③

## 文語体について

俳句は韻文であることを守るため文語を使用し、用言においては歴史的仮名遣いを必ず使用することとする。

## II

### 俳句の約束事

一、切れ字（十八字）を使い俳句にメリハリをつける。

現在切れ字とされている文字は、や、かな、けり、もがな、し、ぞ、か、よ、せ、れ、つ、ぬ、へ、す、いかに、じ、け、けん。

二、表現

主観を直接表現せず、具象表現を使うことにより、自分がその一句の中で言いたい主観を暗示の形で言い表す。

三、地名・固有名詞

地名・固有名詞は一句の中にあつて季語に次ぐ重要な働きをするが、一句の中で使用する時は少なくとも大方の俳人が知っているであろう地名・固有名詞にとどめる。

四、三段切

形は三段切でも言わんとする内容が繋がって居れば良しとする。

例 完全な三段切 奈良七重七堂伽藍八重桜 芭蕉

三段切でも可 初蝶来何色と問ふ黄と答ふ 虚子

五、前書・ルビ

前書は慶弔の句にのみゆるされる。ルビは誌中では使用しない。

## III

### 俳句の作り方……山口誓子

私の俳句の作り方を、図式で現せば、至極簡単である。感動が先立たねばならぬ。事物と出会って思わず「ああ」と叫ぶその叫びから、俳句は生まれるのである。